

SHOW-HI SVシネマフルーツ

★★★★★

6才のボクが、大人になるまで。

2014年・アメリカ映画

配給／東宝東和・165分

2014(平成26)年11月16日鑑賞

TOHOシネマズ西宮OS



Data

脚本・監督・製作：リチャード・リンクレイター
出演：パトリシア・アークエット／イーサン・ホーク／エラー・コルトレーン／ローレライ・リンクレイター／マルコ・ペレラ／チャーリー・セクストン／ブラッド・ホーキンス／ジェニィ・トゥーリー／ゾイ・グラハム

みどころ

6才のボクが中学、高校を経て大学に入学するまでの12年間を映画に？ドキュメンタリーならそれも可能だが、同じ俳優が集まり、毎年脚本を練って劇映画を作るという企画は到底ムリ。誰もがそう思ってしまうが、リチャード・リンクレイター監督の辞書には「不可能はない」らしい。

まずは丸顔のメイソンが、頬のこけたヒゲ面の大学生に変身するまでの生きザマに注目！そして、ボクを中心とする家族の喜びと悲しみの展開を、自分の人生と対比しながらじっくり味わいたい。

しかし、本作はあくまで18才まで。新たな旅立ちの中、メイソンはこれからいかなる人生を・・・？

————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * —————

■□■この邦題にはあっと驚く意味が！■□■

本作の原題は『Boyshood』だが、邦題は『6才のボクが、大人になるまで。』2時間45分という長尺となった本作は、この邦題をそのまま理解すればOK。あえて言えば「大人」を「18才」と言い換えるくらい。つまり、本作は6才のボク＝メイソン（エラー・コルトレーン）が18才となるまでの成長の物語を、父親メイソン・S r.（イーサン・ホーク）、母親オリヴィア（パトリシア・アークエット）、姉サマンサ（ローレライ・リンクレイター）との関係を軸としながら描いたものだ。したがって、原題の『Boyshood』より邦題の方が本作を正しく言い当てている。

そこであっと驚くのは、このような場合6才のメイソンと18才のメイソンを同一の俳優が演じることは不可能だから、必ずどこかで俳優を切り替えるところ、本作ではなんと

同じ俳優が演じたこと。そういうとすぐに「ええ、ウソー」という反応が戻ってきそうだが、まさにそうなのだ。そして、それは姉のサマンサを演じたローレライ・リンクレイターも同じだし、父親も母親も同じ。もっとも、父親と母親は大人だから、12年の歳月が経ってもそれ相応の変化（母親の場合は体型においてかなりの変化だが・・・）で済むが、少年期から青年期、あるいは少女期から女性へと至る男女の場合は、当然肉体面においても精神面においても激変（大きく成長）するものだ。本作ではエラー・コルトレーンという同じ俳優が、6才から18才までの12年間も、同じ人間メイソンを演じたが、何より衝撃的なのは、このエラー・コルトレーンの肉体と顔の変化だ。あの丸ぼちやの可愛い6才の男の子が、12年後には頬のこけた眼光鋭いイケメン男子に・・・。何よりもその変化に注目！

それにしても、リチャード・リンクレイター監督は本作でなぜそんな構想を？



©2014 boyhood inc./ifc productions i, l.l.c. all rights reserved.
2014年11月14日(金)大阪ステーションシティシネマほか ロードショー

■ロード映画界で12年契約は超異例！出演料は？契約内容は？■ロード

日本のプロ野球から大リーグへ移籍した松坂大輔、ダルビッシュ有、田中将大の契約年数と契約金はそれなりにすごかった。しかし、去る11月19日に発表されたマーリンズとナ・リーグ本塁打王ジアンカルロ・スタントンとの契約は、13年、374億円という大リーグ史上最高額のものになった。スタントンは現在25才だから、13年間実働できる可能性は十分だが、他方でケガ等によって契約がバーになるリスクもある。したがって、そんな契約書を調印するについては、細心の注意が必要だ。長期大型契約が相次ぐ大リーグでは、そんなリスクを冒しても実力ある選手をキープしておきたいわけだが、映画は1本ごとの一発勝負だから、1本ごとに出演料を交渉すればいい。もちろん本作もそうだが、

超異例なのは本作の制作には12年間もかかること。つまり、本作に出演する俳優は、12年間毎年本作の撮影のために自分の役を演じ続けなければならぬわけだ。韓国のキム・ギドク監督は短期間撮影で有名だが、本作はその対極を成している。

パンフレットによると、母のオリヴィア役を演じたパトリシア・アークエットは「次の12年間の予定はどうなってる?」というリチャード監督の言葉を「最高の殺し文句じゃない?」と前向きに捉えたそうだ。また父親のメイソン・S r. を演じたイーサン・ホークも「12年間も費やして1本の映画を作るというのは、信じられないくらい面白いアイデアだった」とリチャード監督のアイデアを高く評価しているから、「出演決定」は容易だった。さらに、姉サマンサ役は同役を演じたがっているリチャード監督の実の娘ローレライ・リンクレイターが身近にいたうえ、監督が娘のスケジュールをいくらかでも管理できたため、すぐに「決定」したそうだ。

しかし、肝心のメイソンを演じる6才の少年をどうやって見つけたの?6才の少年に「これから12年間、毎年この映画に出演して演技するんだよ」ということをホントに納得させられたの?少年の健康はもちろんだが、最大のポイントは6才の少年の「やる気」が12年間も続くかどうかということだ。メイソン役を演じたエラー・コルトレーンはそんなこんなの大なりリスクを背負って選出されて、結果的に12年間かけて本作は完成したわけだ。

私は弁護士として映画関係の契約書等を作成する機会も多いが、さて、12年契約を結んだ本作の主要出演者4人の俳優の出演料は?また、契約書の内容は?そんな点も考えながら本作を鑑賞すれば、より興味の幅が広がるはずだ。

■□■ストーリー構成は毎年適当に?物語の目線は?■□■

本作は12年間、毎年夏頃にスタッフ全員が集まって撮影していくスタイルをとったから、ストーリー(脚本)も進行に合わせて練られていったそうだ。とはいっても、メイソンが6才の時に、父メイソン・S r. と母オリヴィアが離婚するところからスタートする



©2014 boyhood inc./ifc productions i, l.l.c. all rights reserved. 2014年11月14日(金)大阪ステーションシティシネマほか ロードショー

という構想は、最初から決定していたようだ。本作のポイントは、メイソンの視点でストーリーが構成されていくこと。したがって、当初は6才のボクの目線で家族の様子が語られていくが、そこは映画だからということもあり、波乱万丈のストーリーが展開していくことになる。

ボクたち家族が暮らしているのはテキサス州だが、ボクが6才の時、既にパパはママと離婚して1人でアラスカを放浪していたらしい。まあ、そんな状況なら、もっといい仕事に就くために大学に入ろうと決めていたママがテキサス州に住む必要はなく、おばあちゃんのいるヒューストンへの引っ越しを決めたのも頷ける。ボクもサマンサも引っ越しには反対だったが、子供の分際でママの意思決定に逆らうことはできずヒューストンへ移ったが、アラスカのパパには家族の引っ越しのニュースはちゃんと伝わっているのだろうか？そんな心配をしていたが、アラスカから戻ってきたパパは、ちゃんとボクたちのいるヒューストンにやってきてくれたし、ボーリング場に連れて行ってくれたから嬉しかった。しかし、生真面目タイプのママは、面会にやってきたパパが子供たちを遊びに連れて行くばかりなので、おかんむり。家の外で2人は激しい言い争いをしていたし、パパはそれでキレたようになって行ってしまったから、また面会に来てくれるのかどうかが心配だ。

そんなメイソンの目線で、まずは家族の「お引っ越し」のストーリーとパパとの「面接交流」の様子が描かれる。ところが、勉強するためにヒューストンに行ったはずのママが、突然再婚することになったから、ボクとサマンサの生活にも大きな変化が・・・。

■□■ママの再婚その1、再婚その2はいかがなもの・・・？■□■

本作はメイソンをメインとする12年間の物語だから、メイソンの12年間の変化（成長）が最大の見もの。しかし、パパとの離婚後、大学教授のビル・ウェルブルック（マルコ・ペレラ）と再婚し、その後更に、元陸軍兵のジム（ブラッド・ホーキンス）と3度目の結婚をするオリヴィアの変化（これも成長？）にも注目したい。フランスでは自由に生きることが女性の最高の価値とされているため、離婚、再婚をくり返す女性も多いが、今やそれがアメリカでも・・・？

ママの最初の再婚のお相手はヒューストン大学の先生だから、ママにとっては最高のお相手？そう思っていたが、ビルにはミンディとランディという2人の子供がいたから、急に大家族になったボクとサマンサは大変。ヨーロッパの新婚旅行から帰ってきた頃は楽しい6人家族だったが、ビルの口うるささと酒癖の悪さが目立つと、「暴君」としか言いうようがなくなってきた。ある日は、ボクの髪が長いのが気に入らないと言って、半ば強制的にボクの髪を丸刈りにしてしまったから、こりやハッキリ言って子供の人権侵害。こんな時頼りになるはずのママもボクを助けてくれず、「何で再婚したの？あいつサイテー」というボクに対する、ママの「完璧な人はいない」という返事は一体ナニ？もっとも、アル中気味になったビルが暴力を振るいはじめると、さすがにママも我慢できず、ボクとサマンサを連れて新しい隠れ家に逃げ、ボクたちは着の身着のままで新しい学校に通い始め

ることに。弁護士の私から見れば、なぜオリヴィアはビルに対して離婚請求をして慰謝料を分捕らないの？と思ってしまったが、きっとそれでは映画のストーリーとしてはありきたりすぎるのだろう。後半でもオリヴィアは、ボクが15才になった時の感謝祭のパーティで知り合ったイラクとボスニアに派兵された元陸軍兵のジムとあっさり3度目の結婚をしたが、ジムもボクの夜遊びやドラッグに眉をひそめる堅物だった。6才のボクならともかく、15才の思春期になったボクをこんな父親がコントロールすることなど到底不可能だ。

本作は、母親が2度も再婚したことによって、ボクとサマンサがさまざまな試練を受ける姿を描いていく。それは映画（の脚本）としては面白いが、オリヴィアの生き方としてはいかがなもの？男をとつかえひつかえしながら子供を育て、自分も大学で教える立場になつたのだから立派なものだが、それができたのは一方で最初の夫メイソン・S r. が一貫して子供たちに対して愛情を注ぎ、いい教育（？）をしてくれたおかげかも・・・。

■□■男の思春期には父親が不可欠なことを痛感！■□■

去る11月4日のアメリカの上・下院の中間選挙で民主党が共和党に大敗したのは、オバマ大統領の人気が一貫して下降しているため。しかし、メイソンは2009年1月にアメリカ初の黒人大統領となったオバマ大統領のファンで支持者らしい。そんな時、パパはミュージシャンの道をあきらめて、保険計理士の資格を取つて保険会社に勤めていた。そして、ママは修士号を取り、教師として就職できる大学を探していた。ボクが6才から思春期に成長するまでの間に、当然ながらパパもママも大きく変化していたわけだ。

こんな風に思春期になった男の子と、離婚したとはいえ毎年心を通じ合い、男同士の会話を交わしているパパとの会話が、本作中盤で次第に女の子に関する内容になっていく様子は興味深い。これはいわば、父親による息子への一種の「性教育」でもあるわけだが、そこでの会話は学校における机上の性教育とは異なり、実践的！しかし、第1にパパがメイソンに授けた、避妊についての対応策は？第2に「女の子と1対1になった時、いったい何を話したらいいの？」というボクの質問に対するパパの答えは・・・？こんなシーンを見ていると、男の思春期には父親が不可欠なことを痛感！

■□■オースティンでは？おじいちゃんとの交流では？■□■

誰でも、中学校に入った時は環境の変化に対応するのが大変だ。メイソンの場合は、ママが教壇に立つ大学が決まり、オースティンの小さな町に引っ越したため、そこで新しい中学校に入った。しかし、髪の毛が長く、可愛い顔立ちのメイソンはゲイにまちがえられてイジメの対象とされたから、大変。もっとも、スクリーン上をみてみると、この頃のメイソンはさまざまな人生経験のおかげか、かなりしたたかとなり、イジメる男の子たちとの駆け引きもうまいものだ。さらに、女の子にも結構モテているようだし、男の友達もで



©2014 boyhood inc./ifc productions inc. L.L.C. all rights reserved. 2014年11月14日(金)大阪ステーションシティシネマほか ロードショー

きているうえ、ビールの味やキスの味も・・・。なるほど、やはりアメリカの子供は早熟・・・？

父メイソン・S r. との「面接交流」は、この時点でもずっと続いていたが、今やパパもアニメ（ジェニイ・トゥーリー）という女性と再婚し、すっかりマイホーム主

義になっていたのは意外。その結果、若い頃はあれほど車にこだわっていたのに、今はファミリー・カーに買い替えているうえ、「ボクが16才になつたらこの車をやる」という約束まで忘れてしまっている始末だ。その代わりにパパがボクにくれたプレゼントは、自分で編集したビートルズの『ブラック・アルバム』だ。そして、この時ボクははじめてパパの実家に連れて行ってもらい、そこではパパとアニメからはスーツを、おじいちゃんから20口径の散弾銃を、おばあちゃんから名前入りの聖書をプレゼントしてもらった。さらに、おじいちゃんからは射撃のレッスンもつけてもらったから、ボクもだんだん大人に・・・。

■□■ガールフレンドは？進路の決定は？■□■

私たち団塊の世代は、「良い中学、高校に入り、良い大学に入ること」という進路が決められていたから、基本的にそれを踏み外すことはできなかったが、今の日本の若者や、アメリカの若者たちの進路はもっと自由。また、私自身は男ばかりの中高一貫教育の学校で6年間育った私のだが、基本的に「歪な女性観」を持っている同級生が多いが、今の日本の若者やアメリカの若者たちはその点でも自由。6才→思春期→中学生→高校生と成長していくエラー・コルトレーンが毎年無事メイソン役を演じてくれる限り、ストーリーの作り方はどのようにでも可能だ。

そのポイントの1つがガールフレンド。本作では高2になったメイソンが、ガールフレンドのシーナ（ゾイ・グラハム）を連れて既に大学生となって寮に住んでいるサマンサのいるオースティンに遊びに行く風景が描かれる。「来年の夏には僕もこの街で自由に生活している」と胸を高鳴らせるメイソンは、サマンサもルームメイトも留守だというので、サマンサの部屋のベッドにシーナと一緒に寝ていると・・・？メイソンの初エッチがこの時だったのかどうかは知らないが、並みの男としての成長は順調なようだ。

もう一つのポイントは進路の決定。高校生になってカメラを買ってもらったメイソンは、写真に夢中となり、将来の夢はアート系の写真家になることに決定したが、自分にしか撮

れないものとはナニ？それを探すのは大変だ。そう思っていたが、メイソンの感性は結構鋭いようで、写真で賞をもらい、その奨学金で大学に進学できることになったから立派なもの。私は中・高校時代は受験勉強一色の中で、映画、卓球、将棋、囲碁、柔道の真似事、等々に欲求不満の気持をぶちまけていたが、大学に入学するや否や、学生運動一筋に打ち込んでいった。ガールフレンドもでき、進路も決定した今、メイソンはどんな気持で新たな旅立ち（独り立ち）を迎えるのだろうか？

■□■ついに旅立ちの時が・・・■□■

私は、朝日新聞社編『17歳のころ』（02年、プレーンセンター刊）に収録されている59名の「達人」の1人として「アジ演説・ビラ作り役立った」というタイトルで掲載されている（154頁）が、その中の写真は19才の時のもの。自分ではそれなりにハンサムだと思っているが、どちらかというと丸顔だから、本作にみる大学生になったメイソンのようにシャープなイメージはない。アメリカでも、大学生になるのは17～18才のはずだが、大学生になったメイソンを見ていると、頬がこけ、ヒゲ面だからビックリ。これが6才の時のあんなに丸顔で可愛かったメイソンの12年後・・・？

メイソンをここまで育ててきたことについては、オリヴィアの苦労が1番大きかったのは当然だから、自宅で開いたメイソンの卒業祝いのパーティでのオリヴィアの心境は？メイソンが家を離れるのを機にオリヴィアは修繕費がかさむ家を売り、アパートへ引っ越した。そして、その日オリヴィアはメイソンに対して、「今日は人生最悪の日」と言ったが、その意味は、自分に残されているのは葬式だけだからだそうだ。しかし、メイソンが見ている限り、オリヴィアは燃え尽き症候群に陥るほど弱い人じやないから、その本音は・・・？他方、メイソンがパパに話したのは、シーナと別れたこと。これに対してパパは「お前がブレなければシーナみたいな女は山ほど寄って来る。得意なものがあれば女は選べる。写真を続けろ」とアドバイスしたが、今のメイソンにその言葉がどこまで理解できたのかは難しいところだ。

9月24日に観た中国四大女優の1人・趙薇（ヴィッキー・チャオ）の初監督作品となった『So Young～過ぎ去りし青春に捧ぐ～（致我們終將逝去的青春）』（13年）は、大学への入学日から始まる面白い映画だった（『シネマルーム34』385頁参照）が、本作はラストが、メイソンの大学入学の姿になる。中国の学生寮は4人同室だったが、アメリカでは2人同室。メイソンはその日はじめて出会った同室の男とその彼女（？）らとともにハイキングに出かけ、山の上で女性と2人並んでずっと座っていたが、さあここから始まるメイソンの旅立ちとは？ちなみに、私は1967年4月に大阪大学に入学した数日後、阪大キャンパスの芝生の上でメイソンと同じように女の子と2人で座り、そこででの会話から新しい旅立ちのスタンスが固まったが、さてメイソンの場合は・・・？

2014（平成26）年12月3日記